

Title	素畫に就いて
Author(s)	神田, 喜一郎
Citation	東洋史研究 (1940), 5(3): 193-195
Issue Date	1940-04-30
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/145689">http://dx.doi.org/10.14989/145689</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

# 素書に就いて

神田喜一郎

嘗て羽田博士が「唐光啓元年書寫沙州伊州・地志殘卷」と題して廣く學界に紹介せられたスタイン蒐集敦煌文書中の一斷簡は、既に博士の指摘せられた通り、幾多の點に於て注意すべき記事を含んでゐるが、その中でも伊吾縣の祇廟に關する記事の如き、殊に主要なるものとして、故藤田劍峰博士や石田杜村學士の精密なる研究を経てきた所である。わたくしも前年「祇教雜考」を草して世に問うた時、またその記事を引用して聊か考證を試みる所があつた。然るにその記事の中に火祇廟中有素書形像無數

といふ一見極めて平易に似て而かも解釋に苦しむ一句がある。素書形像とは何か。これが問題であることは言ふまでもない。わたくしの知る所では、この問題を始めて解釋したのは藤田博士である。博士はその「支那印刷の起原」と題する論文に於て唐の慧立の慈恩傳<sup>⑤</sup>

に、玄奘の死せんとするや、嘉尚法師をして翻する所の經・造つた所の像を具錄せしめ、「又錄造俱胝畫像・彌勒像・各一千幀。又造素像十俱胝。」と言つてゐるのを解釋して、

素は埽と同じく、塑と通じ、素像は即ち塑像である。尤も Pelliot 氏 發見の沙州都督府圖經の斷片中に「祇廟中有素書形像無數」とあり、素像は素書形像即ち素描の形像とも取れぬこともないが、しかも玄奘の死期の至れるを知るや、慈恩傳に「今欲往蘭芝等谷、禮辭俱胝佛像、於是於門人同出云云、」と云ひ之を蘭芝等の谷に安置してあつた様子から視ると、塑像と視るが穩當のやうである。

と述べ、偶々素書形像に説明を加へられた。この博士の解釋を推考すると、素像と素書形像とは別であつて、素像は塑像であり、素書形像は素描の形像であるとい

ふことになる。素像の塑像であることは固より博士の説かれる通りであつて、現にいま引用した慈恩傳の文なども、宇都宮學士の慈恩傳の攷異によると、高麗藏本には塑像に作つてある位である。然し素書形像に就いては、わたくしは博士と解釋を異にし、これまた素像と同じく塑像のことであると考へるのである。以下これに關する鄙見を述べてみよう。

抑も素書といふ言葉は、わたくしの寡聞では、いまの沙州・伊州地志殘卷に見えるのみで、その他には全然用例のあるを知らない。然るに六朝や唐代の金石文に素畫といふ言葉が見える。即ち

(一) 北齊天統三年張靜儒造浮圖竝素像記(陶齋藏石記卷十二)にいふ

在黃岡上。造浮圖一區。素畫像容。刊石立形。

釋迦菩薩。妙巧班公。

(二) 唐太和七年龍興寺造上方閣畫法華感應記(山石刻叢編卷九)にいふ

兼造上方閣一所。竝畫法華感應事相。及素畫彌勒佛。

とあるのがその例である。この素畫といふ言葉は、ま

た敦煌の金石文や文書の中に、素と畫との二字に分ち用ゐる互文として對舉した例がある。

(三) 隴西李府君修功德碑記(西域水道記卷三・沙州文錄)にいふ

由是巡山作禮。歷險經行。盤廻未周。軒輊屹斷。剗削有地。締構無人。遂千金貿工。百堵興役。奮鎚鑿壑。揭石聒山。素涅槃像一鋪。如意輪菩薩。不空罽索菩薩各一鋪。畫報恩天請問・普賢菩薩・文珠師利菩薩・東方藥師・西方淨土・千手千眼觀世音菩薩・彌勒上生下生・如意輪不空罽索等變各一鋪。賢劫千佛一千軀。初坏土塗旋布錯彩。豁開石壁。儼現金容。

(四) 大番故燉煌郡莫高窟陰處士公修功德記(沙州文錄)にいふ

遂則質良工招鍛匠。弟二層中方營窟洞。其所鑿窟額題報恩君親也。龕內素釋迦牟尼像并聲聞菩薩神等共七軀。帳門兩面。畫文珠・普賢菩薩并侍從。南牆畫西方淨土・法花天請問・寶思變各一鋪。北牆。藥師淨土・花嚴・彌勒・維摩變各一鋪。門外。護法善神。然則金烏東谷。隨佛日

以施仁。玉兔西山。引慈雲而布潤。

わたくしは以上列舉した例から考へて、沙州・伊州地志殘卷の「素書形像」は「素畫形像」の誤寫に相違なからうと思ふ。然らば素畫とは何かといふに、清の錢大昕は潛研堂金石跋尾續卷三に、わたくしの第二に舉げた唐太和七年の碑を青蓮寺碑の名の下に著録して碑有素畫彌勒佛之語。按說文無塑字。唐宋碑刻。或作塼。亦俗。不若作素之爲得也。

と言つてゐる。而して陶齋藏石記の著者も、わたくしの第一に舉げた北齊天統三年の造像記の跋語の中に、この錢氏の説を引用して賛意を表してゐるのである。素畫の塑像であることは殆ど疑なからう。その畫の字は彩色を施す意である。わたくしが第三に舉げた李府君修功德記に「初坏土塗施布錯彩」とあるのは、そのことを尤も能く物語つてゐると思ふ。

注

- ① 小川博士還曆記念史學地理學論叢
- ② 史學雜誌第三十五編第十一號。但し博士はこの沙州・伊州地志殘卷を毎時も誤つてベリオ氏發見の沙州都督府圖經として取扱はれてゐる。

③ 同上第三十九編第六號

④ 同上第四號

⑤ 劍峰遺草

⑥ 慈恩傳卷十。いま藤田博士所引のまゝに従ふ。

(昭和十四年十一月五日東洋史談話會大會講演)

### 京漢線とところどころ

昨日北京を出發して豫定通り旅行に出ました。色々な事故の爲め、汽車は四時間近くも遅れて石家莊に延着しました。途中保定あたりからなごやかな新正月の春日和ががらりと變つて、一面の雪景色になつたのに驚かされました。石家莊も到る所水溜りがあつて十二日に雪が降つたとのことです。今朝十時五十五分そこをたつて順德に着きました。今日はよい天氣です。順德は河北省南部最大の町でなか／＼立派です。事變以後道制がしかれてから冀南道公署の所在地となつてをります。日本人は一千人といはれてゐますが、六割までは半島人とのことで中でも女が特に多いさうです。時間がないので夕方薄暗くなるまで城内をあちこち見て廻りました。有名な開元二十七年の道德經幢は随分荒れてはゐますが、碑で堂が造られて保存されてゐます。俗に西大寺といはれる天寧寺には元の趙孟頫の書いた碑があります。開元寺はこれに對して東大寺といはれ、唐の鐘離權の詩にもよまれてゐる所です。境内は荒れてゐますが、宋金元の碑がいくつも立つてゐます。元の世祖が何處か行幸した所の様で所謂俗語體の聖旨碑も二つありました。明日は午前中に邯鄲に向ひます。(昭和十五年二月十四日比野丈夫)